

令和元年6月26日現在

機関番号：11501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02440

研究課題名(和文)ディケンズ文学と「子供の表象」：センチメンタリズムの構造分析

研究課題名(英文) Dickens and the Representation of Child: Analysis of Sentimentalism in Dickens

研究代表者

中村 隆 (Nakamura, Takashi)

山形大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：00207888

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：ディケンズの16の長編小説に対し、tear係数、child係数、tear-child係数の分布を統計的な手法で分析した。tear係数とは、作品の語数に占めるtear(s)の割合を示す。child係数は、作品の語数に占めるchild(children)の割合を示す。tear-child係数は、tear係数とchild係数を掛け合わせ、その値(平方根)の算出値である。

tear-child係数の上位3つの作品は、Oliver Twist、Old Curiosity Shop、Dombey and Sonであり、これらがもっとも感傷度の高い作品であるということが数値的に証明された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ディケンズの16の長編小説に対し、tear係数、child係数、tear-child係数の分布を統計的な手法で分析した本研究の(1)学術的意義は、一般に感傷的であるとされてきたディケンズの印象批評の評価がtear-child係数という客観的な数値によっても証明されたことである。(2)本研究の社会的意義は、言葉を数値的に処理する統計的な手法は、今後も広く文学の評価をする際の客観的かつ明示的な指標となりえるということであり、あらゆる文学作品に応用可能であることである。

研究成果の概要(英文)：The distribution of tear coefficients, child coefficients, and tear-child coefficients was analyzed by a statistical method for Dickens's 16 novels. The tear coefficient indicates the ratio of tear(s): that is, frequency of tear(s). The child coefficient indicates the ratio of children (children), that is to say, frequency of children (children). The tear-child coefficient is a root value by multiplying the tear coefficient and the child coefficient. The top three works of the tear-child coefficient are Oliver Twist, Old Curiosity Shop, and Dombey and Son. These three proved to be predominant in respect of sentimentality and/or sentimentalism.

研究分野：英文学

キーワード：ディケンズ tear係数 child係数 tear-child係数 統計学的手法 感傷主義

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 子供の表象におけるセンチメンタリズムの基本原則

子供に関する先駆的研究で知られるアリエス (P. Ariès 1960) を初めとして、一国の文化史における「子供の表象」の研究は豊かな沃野である。アリエスとほぼ同時期に、コヴニー (P. Coveney 1957) が、英国のロマン派詩人が描いた無垢な子供たちを「ロマンティック・チャイルド」と定義したことはよく知られている。

(2) ディケンズのセンチメンタリズムの受容史

コリンズは 19 世紀英国のセンチメンタリズムとディケンズ文学の受容に関連し、以下のように述べている。「1830 年代から 40 年代はディケンズの感傷主義 (pathos) は拍手喝采を浴びたが、1850 年代の後半になると、その称賛に亀裂が生じるようになり、1870 年代以降はその亀裂がさらに広がった」(P. Collins 1974)。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、ディケンズ文学における「子供の表象」を通して、ヴィクトリア朝の文学におけるセンチメンタリズム (感傷主義・感涙主義) の様態をテキスト分析と作品の受容史という 2 つの観点より解明する。

(2) 1850 年代後半を分水嶺として生じるディケンズ文学のセンチメンタリズムへの同時代の痛烈な批判を、受容史の観点から跡づける。そして、なぜ、ディケンズ文学の初期では肯定的な評価を受けていたセンチメンタリズムが漸次的な否定へと推移したのか、未だに解かれていない謎の解明を試みる。

3. 研究の方法

(1) ディケンズ文学の「子供の表象」に関わるセンチメンタリズム表現に関して、文体論の観点から見た文体の基本構造の解明をする。

(2) ディケンズのセンチメンタリズムに関する受容史を 4 つの時代に区分し、評価の変遷とその原因を究明する。時代区分は、(a) 1830 年代から 40 年代 (ディケンズ初期)、(b) 1850 年代 (ディケンズ中期)、(c) 1860 年代 (ディケンズ後期)、(d) 1870 年から 19 世紀末まで (ディケンズの死後の評価) の 4 つである。

4. 研究成果

(1) **tear** 係数の上位 5 位と下位 5 位を示すと以下の左側の表の通りとなる。

tear 係数順位表

child 係数順位表

	作品名	出版年	tear 係数		作品名	出版年	child 係数
第 1 位	Oliver Twist	1837-39	41.80	第 1 位	Old Curiosity Shop	1840-41	300.58
第 2 位	Dombey and Son	1846-48	41.79	第 2 位	Dombey and Son	1846-48	130.90
第 3 位	Old Curiosity Shop	1840-41	34.05	第 3 位	Hard Times	1854	126.58
第 4 位	Nicholas Nickleby	1838-39	32.61	第 4 位	Sketches by Boz	1836	106.20
第 5 位	David Copperfield	1849-50	31.06	第 5 位	Bleak House	1852-54	102.67
第 12 位	Little Dorrit	1855-77	19.25	第 12 位	Great Expectations	1860-61	51.12
第 13 位	Our Mutual Friend	1864-65	18.42	第 13 位	Martin Chuzzlewit	1843-44	44.49
第 14 位	The Mystery of Edwin Drood	1870	17.37	第 14 位	The Mystery of Edwin Drood	1870	33.73
第 15 位	Sketches by Boz	1836	12.45	第 15 位	Pickwick Papers	1836-37	30.61

第 16 位	Great Expectations	1860-61	11.71	第 16 位	Barnaby Rudge	1841	29.54
--------	--------------------	---------	-------	--------	---------------	------	-------

tear 係数の高い順では、*Oliver Twist*、*Dombey and Son*、*Old Curiosity Shop*、*Nicholas Nickleby*、*David Copperfield* で並ぶ。これらは、すべて 1850 年以前の作品であり、tear が感傷度数となっていると仮定すると、ディケンズの前期の作品が感傷度の高い分布を示している。

(2) child 係数の上位 5 位と下位 5 位を示すと上の右側の表の通りとなる。

child 係数の高い順に、*Barnaby Rudge*、*Pickwick Papers*、*Old Curiosity Shop*、*Dombey and Son*、*Hard Times*、*Sketches by Boz*、*Bleak House* がある。これらはすべて 1854 年以前の作品であり、child が感傷度数となっていると仮定すると、ディケンズの前期の作品が感傷度の高い分布を示していると見ることができる。

(3) tear-child 相関とは、感傷度数と相関すると思われる tear と child のそれぞれの頻度を掛け合わせ、それを (ルート) 値に計算し直されたものである。ここでは、この 2 者が共起している時、感傷度数が上がるだろうということを想定している。言い換えると、「涙」と「子供」を引き合いに出し、「お涙頂戴 = tear jerking」の度合いを急上昇させる感傷のテクニックをディケンズは用いていることを予想した。tear-child 係数の上位 5 位と下位 5 位を示すと下の表の通りとなる。

	作品名	出版年	tear-child 相関
第 1 位	Old Curiosity Shop	1840-41	101.17
第 2 位	Dombey and Son	1846-48	73.96
第 3 位	Oliver Twist	1840-41	63.64
第 4 位	Hard Times	1854	62.09
第 5 位	David Copperfield	1849-50	50.91
第 12 位	Martin Chuzzlewit	1843-44	30.38
第 13 位	Pickwick Papers	1836-37	27.34
第 14 位	Barnaby Rudge	1841	27.32
第 15 位	Great Expectations	1860-61	24.47
第 16 位	The Mystery of Edwin Drood	1870	24.21

tear-child 相関の高い順でみると、*Old Curiosity Shop*、*Dombey and Son*、*Oliver Twist*、*Hard Times*、*David Copperfield* で並ぶ。これらは、すべて 1854 年以前の作品であり、tear-child 関数が、感傷度数となっていると仮定すると、ディケンズの前期の作品が概して感傷度の高い分布を示している。特筆すべきは、上位の 3 作品で、*Old Curiosity Shop*、*Dombey and Son*、*Oliver Twist* は 1840 年から 1848 年の作品であることである。ここから推測できることは、1840 年から 1848 年にかけての期間がディケンズが感傷に大きく依存して作品を作り上げていたということである。事実、これらの作品は、Oscar Wilde や Aldus Huxley によって「お涙頂戴 = tear jerking」の愚劣な作品とこき下ろされたものである。

The Mystery of Edwin Drood と *Great Expectations* はディケンズの最晩年の 2 作品である。つまり、最晩年において、ディケンズは「お涙頂戴 = tear jerking」に多くを依存しなくなったことは数値が証明している。

<引用文献>

1. Aries, Philippe. *Centuries of Childhood*. Trans. Robert Baldick. New York: Vintage Books, 1962.
2. Collins, Philip. *From Manly Tear to Stiff Upper Lip: The Victorians and Pathos*. Wellington:

the Victoria UP, 1974.

3. Coveney, Peter. *The Image of Childhood*. Harmondsworth: Penguin, 1967.

4. Kaplan, Fred. *Sacred Tears*. Princeton: Princeton UP, 1987.

5. Leech, Geoffrey and Mick Short. *Style in Fiction*. New York: Routledge, 2007.

6. Malkovich, Amberly. *Charles Dickens and the Victorian Child*. New York: Routledge, 2013.

7. Purton, Valerie. *Dickens and the Sentimental Tradition*. London: Anthem Press, 2012.

8. 田畑智司. 「Dickens と Collins の共著作品への文体統計学的アプローチ」. IPSJ SIG Technical Report, Vol. 2012-CH-93 No. 3 (2012). pp. 1-7.

9. 豊田昌倫 他編. 『英語のスタイル』. 研究社, 2017.

10. レオ・シュピッツァー. 『言語学と文学史 文体論事始』. 訳 塩田勉. 国際文献印刷社, 2012.

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕該当なし (雑誌投稿予定論文の推敲中)

〔学会発表〕(計1件)

1 中村 隆、「ディケンズの文体と感傷主義について」, ヴィクトリア朝研究会 2018 年度春季例会 (日時: 5 月 26 日、場所: 中央大学)

〔図書〕該当なし

〔産業財産権〕該当なし

〔その他〕

ホームページ等